
日記

燐光蘭歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日記

【Zマーク】

2021.9.6

【作者名】

燐汎蘭歌

【あらすじ】

10年ぶりに集まつた、吹奏楽部員。それぞれ、日記を持つている。その日記に書いてあることそれは・・・

1ページ目

とあるホテルの小さな宴会場
一人の女性がすでに居たが窓の外を眺めている。

また一人女性が入ってきたが既に居る女性は気づかず、入ってきた女性が肩をたたき声を掛ける

「ゆうか 裕香、久しぶり」

肩を叩かれた事で驚きつつも振り返り相手を確かめると

「里恵りえ！ げんきだつた？」

「もちろん。今日何人ぐらいぐるの？」

「えーっと、59期から61期のメンバーと、58期の先輩が何人か」

「そつかーーーでも何人かはこないのかな？」

「うーん・・・富村さんとか来るかな・・・」

「富ひさんなら来ると思つけど・・・」

そう話しているうちにだんだん人が集まりだし、一人に声をかけたりする。

「西ちゃん。久しぶり」

「えつと西つさんでしょ。その声の掛け方は」

「あたりい」

「里恵の西つた通りだね」

「何の事?」

「裕香がさ、西つさんこないんじやないかって」

「酷一・稻崎さん酷いよ」

「まあまあ。だつてまだ富村さんの事だからまだあの事引きもつて
ると思つてむ」

「確かに西つだけじ・・・・・」

少し人物を整理しようと思つ。

一番初めに会場にいたのは稻崎裕香^{いなさきゆうか}59期生の吹奏楽部部長である
続いてきたのが安西里恵^{あんせいりえ}彼女も59期生である
会話に入ってきた車椅子に乗った女性が富村真弓^{みやむらまゆみ}西つ必要がないかも
しれないが59期生だ

そして今日は吹奏楽部の58期から61期までの同窓会(?)である。主催者と言つて招集をかけたのは稻崎だつたりする

「ねえ裕香、出席者の確認しないと・・・・・」

「美世莉それは大丈夫。眞実と綾芽ちゃんに頼んだから」

「氷川さん久しぶり」

「みつちやんーーー。」

「セセ里恵やめて」

「西ちやんーーー。」

安西に抱きつかれそうになり悲鳴をあげた氷川美世莉も59期生。
会話中の眞実は倉田真実、綾芽は小瑠璃綾芽
一人とも59期の副部長である

「相変わらず、あの4人の先輩はにぎやかだね、京太」

「だな」

「うん。6人も十分にぎやかだと思うけどな。そう思わない? 一哉」

「うん。同感。で、征哉は誰から聞いたの?」

「えっと・・・き・・・」

「僕だよ。おしえたの」

「京太、征哉に聞いてんだから口出ししない方が・・・」

「神龍の言つ通りだよ」

一気に笑い声が起る。(周りは何事?といつて見ていたが)

ついでに、上から
古谷駿介、小暮京太、湯村浩、針宮一哉、小雅征哉、小暮、神宮龍

二、小雅

の順で話している。全員60期生。

「やあひさしげぶり」

「あ、武藤先輩! !」

「で、俺も居るけどね」

「平先輩」

上から武藤拓斗、小雅、平健輔、針宮。

武藤は58期、平は59期。

「これで、あいつらもくれば男子は全員パーフェクトなんだけどな

と湯村。

「お呼びでしょうか？」

「呼ばれたんで飛び出しました（笑）」

「石村、滝原、先輩に初っ端からそれは無いだろ」

8人の背後から笑いを含んだ声を掛ける3人組
上から石村大樹、滝原祐樹、岡崎浩太
全員6期生

「おわつ！・・・あのさ、滝原ネタ古いよ、それと急に出てくるな

「ですかねえ」

「だから言つたろ」

「流石に7年前のは許されないよ」

再び笑いが起きる。

2ページ目

「相変わらず先輩たちにはにぎやかだよねえ。と言つより変わらないね。特に宮村先輩と安西先輩」

「いつも晴香も変わらないよ」

「えーだつたら妃芽香だつてえ」

上から武藤晴香、矢部妃芽香ともに6期生。

「兄さん達の仲も変わつてないね」

「そうだね」

兄さんは5・8期の武藤拓斗のこと。一人は苗字で分かる通り兄妹きょうだいである。

「IJKのメンバーは中学卒業以来か？」

「だらうつね。高校行つてからあまり集まらなかつたもん」

「ま、皆変わつてないけどね」

「沙子ぐらこじやない？ 変わつたの」

「そんな事無いよ。変わつてないって」

上からおのりから小野寺綾子おのでいあやこ、中川由香里なかがわゆかり、小原沙子こはらさちこ、森山麻琴もりやままいこ、小原。

全員6・1期。再会頻度は極稀。

「さてまた京太に悪戯いたずらすつか」

「綾、それやめたら？」

小野寺のふぞけに中川が釘を刺す。中学在学中は良く見た光景だ。

「野沢、久しぶり」

「谷さん！ ひさしひさしふりだねえ。 1年ぶりかな？」

「だねえ～・・おーい武藤」

「あ、
谷さん、
野沢さん。
久しぶり」

たにまいこ
のざわあいか
上から谷真衣子、野沢亜唯歌、谷、武藤。
3人とも58期生。

「ほんと久しぶりだなあ。特に武藤とは全く会わなかつたし」

「確かにね。でも谷さんとは時々会つたよ。電車の中で」

「そう言えばそうだね」

野沢が武藤に言い、谷が相づちを打つ。

「真衣子、野沢、ムト、久しぶり」

「あ、木田さん。久しぶり」

「これあと、小田が来れば58期はパーフェクトか・・」

「野沢なんですか？」

「3役はつて意味」

「なるほど」

上から木田真由華、武藤、野沢、谷、野沢、木田。
木田まゆか

ムトとは武藤の事。木田と武藤は58期の部長副部長。

ついでに今日来てる3役を上げると

部長	副部長
58期、木田	武藤
59期、稻崎	倉田、小瑠璃
60期、小暮	古谷
61期、	武藤

全員揃っているのは59期だけである。更についてだが武藤兄妹は見ての通り2人とも副部長を経験した

「裕香、時間過ぎたけど結局これだけしか来てないや・・・」

「えつ・・・25人だけ！！」

小瑠璃が、稻崎に名簿を渡しながら言つ。稻崎はその人数を数えてあ然とする。

「ほんとだよ。何で皆こないのかな・・・」

「まあ・・・仕方ないって事で。真実、綾芽ちゃん、ありがとう」

倉田が話に入ってきたが、稻崎は礼を言つて済ませる。

「そりだ皆、例の物もつてきたかな？」

「持ってきてるでしょ。吹奏楽部にいたときの思い出のなんだから」

「じゃあ、適当に挨拶済まして、皆で例の物見たり話したりにしそうか」

「賛成」

稻崎の言ひ、例の物、とは何か？

それは稻崎の挨拶が終われば分かるだろう

「木田先輩一寸良いですか？あと、小暮君も」

「え、いいけど」

「なんすか？」

稻崎が、木田と小暮に声を掛け前の方に移動する。

「一応、今日来てる部員には少しだけ話をして貰おうと思つたんですけど・・・」

「え・・・稻崎先輩、ちよつ・・・」

「良じよ。手短こやるから。小暮君もやるよな」

小暮が書いつの遅つて木田が書いつ。小暮には眞無を言わせないような調子である。

「・・・やります・・・」

小暮は諦めたのか素直に言ひへ。

「それじゃあ、最後に木田先輩御願いします」

稻崎と小暮の話が終わり（二人とも短かつたが）小瑠璃が木田に前に出るように促がす

「はい。皆久しぶりです。今日は皆で楽しみましょう。以上です」

木田も短く終わらせる。

「！」の後は、時間になるまで話したりしてください

小瑠璃がそう言つて皆、それぞれ話し始める。

「やう言えば、例^あの物持つてきた？」

稻崎が数名（安西、氷川、小瑠璃、富村、倉田）に聞か。

「もううん持つてこないわけ無いじゃん

「持つてきたけど・・・あの日から一週間ぐらいた空欄になってる・・・

「

「仕方ないって、書いて無くつても」

上から、倉田、富村、安西。

そういうながら、取り出したのは小さめのノート。表紙には『日記^{日記}』などと書いてある。

「これは伝統だもんね。・・・やうだーべつせなうと今届るみんなで交換して読もつよ」

「え、・・・」

「賛成！――皆に声かけるね

小瑠璃の発言に氷川は難色を示し（とこつか一歩引いた）稻崎は賛成し、皆に声を掛け日記交換をする

ちなみに、伝統言つのは吹奏楽部で2年生は2年間（卒業まで）日記を書くといつものである。

皆が交換してゐる中、富村は少し離れた所でその様子を見ていた。安西はそれに気がつき、声を掛ける。

「富ちゃんは交換していないの？」

「うん。人數的にあまるから。それに字汚し、動きにくいし」

「見せてー！」

「あ、ちよつと・・・じゃあ西ちゃんのも見せてよね

「いいよ。僕も汚いけど」

宮野は車椅子のため安西が立つと手が届かない。そのため、安西と日記を交換する事にした。

安西の日記帳の表紙には色々な色で『日記帳』、富野の表紙には黒で『吹奏楽日記』と書かれている。

「この時点で一人の性格の違いがわかるだらう

書いてあることは全く違つたが、3日ほど同じ事が書いてある。それは定期演奏会と、卒業式、そして・・・

「富っさん、やつぱりあの事書いてあるね」

「西ちゃんも書いてるじゃん」

安西は不満そうな表情、富野は怒りと悲しみの混じった表情で日記を見つめている

「富村先輩、安西先輩、見せてください・・・・・どうしたんですか？」

「え、ごめん京太、良いよ。私のは西ちゃんが持つてるから見て」

「僕のは富っさんがもつてる」

小暮が一人の所に来て二人に声を掛けるが、一人の表情を見て怪訝な顔をする。
だが、富野と安西は3人で日記を見る事に賛成する。

「やつぱり先輩たちかいてますねあの事」

「体中痛いし足の感覚無いしで書く力なかつたんだけど、一行だけでも書こうとつて思つて」

「重大な事でもあるからさ、中学が燃えたのは・・・」

「俺、あれから将来の方向を変えて、消防士になりました」

「え、小暮君が消防士！」

「ありえねえ～」

「ここのあの事、つまり中学が燃えた日の事を3人の日記で見てみよう。」

2月×日（M○n）曇り（但し降水確率0%）

今日、部活が始まったばかりの頃に学校が燃えた。

2階の第一理科室から火が出たらしいけど、アルコールランプでも使っていたのだろうか？

音楽室は3階だから、逃げられるか不安だった。

案の定火の回りが速かつたし、第2理科室からはガス漏れをしていたらしく、3階まで火が来るのは

あつという間だった。今考えると音楽室に行く時、第2理科室前とかがガス臭かった気がする。

でもガス爆発で音楽室の床が吹っ飛ばなかつたのが凄いかもしれない体育館の方は大変だつたらしい。

大体は窓から避難用ので逃げる事ができたけど、途中でそれは燃えてしまった。

宮つさんと武藤さん矢部さんが逃げる事が出来なかつた。

3人はまだ燃えていない部室の方に行つて窓から逃げようとしたらしい。

確かに窓には耐震用の枠組みがあつて降りる事は可能だと思つ。それでどうしたかはわからない。詳しい事を聞いてないから。

判つているのは、パークアスの部室にあるロープで2階の少し上（そこは燃えていなかつた）まで降り、

もう一本のロープで、1階の枠組みまで降りたということ。
ただ、武藤さんが2階から、1階へ降りようとしたらロープが切れたらしい。

幸い、枠組みを掴む事が出来たそうで、手首の捻挫で済んだ。

けど富つさんはロープがもう使えないから枠組みをつかんで降りる事に下らしいけど、

手が滑つてそのまま地面に落ち、病院行きになつたらしい。
まあ僕もぼーとしてたから聞いてなかつたけど。

一つ頭に來るのはあのハゲ顧問。何で切れるわけ？避難が遅かつたつて。

裕香の現状説明も聞かないで、それにあの中で楽器を持つて避難しろともいいたいのか？

小暮君がハゲ顧問を呼びに来たけど黙殺したため、荻原先生をよん

で駐車場兼学校裏に

走つていつた（僕達は学校から少しあなれたテニスコートで人数確認が終了した部から下校となつた）

その後、皆でハゲに対し切れまくつてから、一回学校の方に移動してパートドゴとに確認をして、

勝手に下校した。（鞄を校庭においていたから戻つた。）

顧問に連絡を入れる気は副部長や部長ですら全く無い。多分少ししたら部内の連絡網を使うだろ？

それに明日は公園に集合する事になつてゐる。

暫く臨時休校になる。原因究明とかするらしい。

安西の日記より

月 日()

昨日学校が火事になつた。火元は理科室らしい。体中が痛い。地面ではなく車の上に落ちた。
さつき麻酔が切れた。日付がかわつてゐる。1時間過ぎてゐる。医者に一生歩けないと言われた。
幼稚園教諭の夢は諦める。でも吹奏楽・・音楽だけは続けたい

富野の日記より

2月×日（月曜日）曇り

学校で火事が起きた火元は理科室。1年理科担当が理科室で煙草を吸つていたら火がついたらしい。
母親の情報網で教えてもらつた。信憑性は・・・・・49%・・・
もし本当なら、学校や理科室で煙草吸うな！だなまず始めに言つべきは。
怪我人の方は友達などから聞いて、コーラス部2人に男バレ5人、女バレ6人に吹奏楽が2人。
コーラス部は慌てた為、転倒による切り傷。男女バレー部は体育館で練習していた事による火傷。
体育館は、第2理科室の上で第2理科室のガス漏れからガス爆発が

起きて、床が吹っ飛んだそうだ。

でも、吹奏楽が一番怪我の程度がやばいかも知れない。

武藤さんの手首捻挫と、富村先輩の全身強打。場合によつて富村先輩は歩く事が出来ないかもしれない

矢部さん（怪我した一人と矢部さんは逃げ遅れた。）が稻崎先輩と僕を呼びにきた事でこの事を知った

菊村先生は黙殺と言うか無視して、僕達に切れていた。

現状確認をした後、稻崎先輩に

「菊村先生呼んで来て、駄目なら荻原先生」

といわれ、菊村先生はぜんぜん聞いてくれなかつた為、荻原先生を呼びに行つた。

荻原先生はすぐにそこへ行つてくれた。荻原先生にほめられたのは始めてだと思つ。

「今回の稻崎の指示と小暮の行動は正しい」と、

その後学校の向かいの家の人おきはらが消防車と救急車を呼んでくれたそうで富野先輩と付き添いと言う形で、

荻原先生と稻崎先輩は病院に行つた。

僕は皆に経過を説明しておいてといわれたから皆の所にに戻りうつしたら、皆が校庭の方にきた。

稻崎先輩に言われたように経過を説明した後、先生に会わないよう下校した。

明日は公園に集合が掛かっている。簡単な部員会議をやるつもりだ。

小暮の日記より

「二人とも書いてあることが過激だよね」

「富野先輩、色々言ひてても3行も書いてるじゃないですか」

「やつ言えば富ちゃんは仕事何やってるの?」

「物書き。小説書いてる」

「で、その小説担当が私だよ」

「のわつ谷先輩驚かれないで」とセイ

「小暮君、驚きます」

「今日は催促受け付けませんからね。それと西田さんは仕事何しているの?」

「通訳。てか、催促って何?」

「富野さんたらなかなか続き書いてくれなくつて。まあ締め切りは来月だけど」

「来月なら無理にせかす必要ないんじゃないですか?」

「そつは行かないんだよ、京太。」「イツ、締め切り近くなつてあせるから今から急かしてゐるの」

「やつ言つていつ変わつてないね富っさん」

「んなの」

笑いが起きるが気にならない。なぜなら周りも笑つたりが多いから。

3ページ目（後書き）

登場人物などがややこしくなってきてしましました。
そのうち、登場人物を整理するページを作ろうと思います。

キャラ紹介（前書き）

名前（3役の学生指揮者）担当楽器名の順です

キャラ紹介

58期

木田真由華
きだまゆか

部長 パーカッショーン

谷真衣子
たにまいこ

コントラバス

野沢亜伊歌
のざわあいか

ユーホニウム

武藤拓斗
むとうたくと

副部長 ホルン

59期

稻崎裕香
いなさきゆうか

部長 クラリネット

安西里恵
あんせいりえ

ホルン

氷川美世莉
ひかわみより

フルート、ピッコロ

倉田真実
くらたまみ

副部長 ホルン

小瑠璃綾芽
こるり りょうめい

副部長 フルート

宮村真弓
みやむら まゆみ

パー カツ シヨン

平健輔
ひらけんすけ

トランペット

60期

小野寺彩子
おのでらあやこ

パー カツ シヨン

中川由香里
なかがわ ゆかり

クラリネット

森山麻琴
もりやま まこと

サックス

小原沙子
こはら さちこ

トランペット

小暮京太
こぐれきょうた

部長 トロンボーン

古谷駿介
ふるや しゅんすけ

副部長 ホルン

湯村浩
ゆむらひろし

トランペット

針宮一哉
はりみやかずや

サックス

小雅征治
こがせいじ

チューバ

神宮龍二
じんぐうりゅうじ

学生指揮者　トロンボーン

6期

矢部妃芽香
やべひめか

パーカッション

武藤晴香
むとうはるか

副部長　トランペット

石村大樹
いしむらたいき

パークッション　バスクラリネット

滝原祐樹
たきはらゆうき

チューバ

岡崎浩太
おかざきひろた

トランペット

以上（確認者、小瑠璃綾芽、倉田真実）

本来は、60人ぐらいの人数なのだが、今日の参加者は25名。
まあ古傷を触りたくないってのが本心なのかな？色々あつたし（稻崎談）

先生がこないなら自分もこないって人も居るからなあ。
それに先生は既に死んでるし（木田談）

もつと来ると思っていたんだけど・・・
けど、男は全員揃つたしいいかと・・・（小暮談）

キャラ紹介（後書き）

やっぱ、人数多いです。
でも頑張ってみます
(汗)

夕方になり、外が暗くなり始める。みんなもつ帰つて行つたが、一部は最後までいるつもつりしき

「後40分ぐらいで、終わりにしますね」

稻崎が、残つてゐる全員に声を掛ける。

「もうそんな時間かあ・・・・」

安西が、誰に言つわけでもなく言ひ。

「まあ、結構帰つちやつたし、残つてるのは・・・うつけと西田ちゃん、裕香と谷先輩と武藤先輩、京太と神龍の7人かあ」

「ねえみやつさん、また集まれるかな? 今日みたいに

「集まれるだろ、別に今日で歸りなくなる訳じやないんだから」「

「やうだよ安西さん。また集まるつて。集まつたりするのがすきなのが多いから」

「やうですね・・・うづくまみやつさんはどんな小説かいてるの?」

「え・・・秘密。谷先輩、言わないで下さいね」

「判つた」

「えーするい」

「悔しかつたら、本探してみな」

「宣伝ですか？みやつさん？」

「当たり前じやん」

「じゃあ図書館で探す」

「え・・買つてよ。売上悪いんだから」

安西と宮野、谷の楽しい会話は暫く続いた。

「なあ神龍は最後までいる？」

「ああ、京太は？」

「もちろんいる。今更帰るのもなんだし・・・あれ？携帯がなってる？」

「携帯ぐらいでなよ。仕事だつたら大変だから」

「そうですね」

そう言って京太は会場の外に出るが暫くして急いで戻り、稻崎に声を掛ける。

「先輩、仕事なんで帰ります。本当は最後までいたかったんですけど・・・」

「良いよ。消防士でしょ、小暮君は。またそのうち集まるかもしないし」

「はい。それじゃあ・・・」

そう言って小暮は大急ぎで会場から飛び出し、所属する消防署へ向かう。

4ページ目（後書き）

少しずつ、最後に近づいてます。
まだ私にも結末はわかりません。（オイ
多分、死者は出ないと思います

5ページ目

「予定より早いですけど、お開きになりますね」

稻崎が声を掛けたのは、5：25。終了予定の5分前だった。ついでに言つと、小暮が出て行つてから20分後

「裕香、」の後何も無かつたら、一緒に出かけない?」

「いいよ、里恵。けどちょっと待つて。代金払つてくるから」

「わかった」

「武藤先輩、少し早いですけど夕食でも食べに行来ませんか? 谷先輩と宮野先輩も」

「いいね」

「うちらもいいよね」

「はい」

そんな会話が交わされている。

「これで解散ですね。・・・じゃあ武藤先輩何か一言」

「な、何で僕?」

「え、だって副部長だったじゃないですか」

「やうだよ。武藤、とうあえずやれ」

「はあ・・・・・えつと、またいつか集まる事があつたら、集まりましょ。以上、解散！」

武藤の解散宣言のあと、それぞれ帰っていく。（ここにしても、2グループになつてたり）

武藤、神保、谷、畠野は、谷の車で、移動していた。
夕食をどこで食べルかまだ決まっていないので、とりあえず、走つてこるところ状態。

「やう言えばやうひらが卒業する時、武藤と畠野さんは色々関係が

話題になつたけじやうなつたの？」

「え・・」

「な、何の事ですか？」

「やう言えば、その頃宮野先輩が、武藤先輩の事を片思いしてるとか、噂がありますでした?」

運転している谷の急な話題に、後ろの乗っている一人は軽く頬が赤くなつた。（特に宮野）

谷の隣に座っている神保は面白やうにそのときの噂を思ひ出して言つう。

「や、そんな噂デマだよ。ねえ宮野さん」

「は、はい。谷先輩、神龍、なに言つてですか?」

「ふーん野沢の話だと、宮野さんが、武藤に告つたとか聞いたけど？」

「本当ですか？後ろのお一方？」

（野沢さん、どこから聞いたんだよ・・・）

（野沢先輩、いくらなんでも酷い、どこから聞いたんだろ）

（図星だらうな。先輩顔赤いし）

（野沢が知つてゐて知らなかつたのか？）

それぞれの心の中の事である
後ろの二人は、更に顔を赤くする。

「あれ・・・先輩、あつちつて中学ですよね？」

「もうだけど、話題変えないでよ」

「いや、変えるつもりは無いんですけど、妙に明るいなと思つて」

「え、・・・ついでに、煙が出てる気がするけど・・・」

「行つてみますか？野次馬として」

「行くには行くけど、野次馬じゃなくつて卒業生としてね」

谷は細い路地に入り中学校のほうへ車を走らせる

5ページ目（後書き）

中学校では何が起こっているのか？

後2ページ分ほどで終わりますが、結末は考え中です。

6ページ目

中学校に向つに連れて、だんだん明るくなつてくれる。

「…………やつぱり火事だ」

「どこの車とめるから、皆先行つて」

そう言って谷は、他の者を下ろして車をどこかに止めに行く。

「10年前と同じ…………」

「まさか…………」

神保と武藤は校舎を見上げ、つぶやく。

富村は何も言わず校舎を見上げていたが、

「…怖い…」

「えつ…びつしたの富村さん」

「怖い、怖い…」

俯いたまま怖いと繰り返す。そんな富村の肩に着いたばかりの谷が手を置き、言った。

「大丈夫、怖くない」

「…・うん・・」

「谷さん？」

「何でか知らないけど、火を見ると怖がるんだ。だから台所でガスコンロを使う事も無いの」

「…・多分、中学校の時に火事が起きてる中に取り残された事のトラウマじゃないでしょうか？」

「神龍、それどう言いつ」と?」

「僕が勤める病院の精神科にも結構いるんです。過去の何かしらの原因があつて水を見るのが怖いとか先輩のように火を見るのが怖いて人が」

「そつか…・ん?あれって京太?ほらあそこで並んでる消防

十

「…………あ、本当だ」

「この近くに配属されてるのかな?」

「わざわざないですか?遠くからはないと思しますし」

小暮達、消防士が学校の中へ入っていくのを見届けた後、また校舎のほうに向き
燃えていく校舎を見つめていた。

「被害は最小限にしき。」

「はい！」

「隊長、今入った連絡ですが中に残されている生徒がいると・・・」

「なつ・・・場所は？」

「音楽室なのですが、管理棟の3階へ行く階段付近は燃えが酷く、行く事が難しいです」

「・・・何人か、音楽室まで行ってくれる奴はいるか？」

「はい、僕が行きます」

「僕も

「よし、じゃあ小暮と古谷、頼むだ。戻る時は窓から2階のパソコン室に下りてくれ。他の者はそれまでに2階の消火をする。いいな」

「はい！」

小暮と古谷、2人とも消防士になり同じ場所に配属された。

「部長、副部長コンビ、復活かな？」

「そうだな」

古谷はにやりと笑いながら、音楽室へ続く階段を駆け上り小暮もそれに答え駆け上がる。

小暮が声を掛けたのに、1人の生徒が答えた。

「・・・・此処・・」

「誰かいる?」

「だろ。まさか此処に居る訳には行かないし」

そんな会話をしながら、部室のほうに行く。

「部室のほうかな?」

音楽室はまだ入り口付近と窓付近が燃え始めたばかりだが、全体が燃えるのも時間の問題だ。

「うわ、燃え方凄いな。あの時と同じか?」

「そうじゃないかな?とにかく音楽室の中に行こう!」

「大丈夫？」

「私は大丈夫ですけど、国沢さん……彼女が足を挫いちゃって」

確かに彼女の後ろにはもう一人生徒がいた。

「他にはいないね。残されてる人は」

「はい。部長の私と、副部長の彼女が最後に避難しようとしたから」

「部長か……京太よりしつかりしてるな」

「つるせえ。さつあと行くぞ」

「はいはい。じゃ、ロープを下ろすから僕とえつと……国沢さんが先、彼、小暮と貴方が後から降りてください」

古谷が一人の生徒に説明する間、小暮がロープを結びつける。

「ロープOKだ。古谷、行けよ」

「わかった。国沢さん、ロープで結んでいるけど、しつかりつかまつててね」

「はい」

古谷は国沢が自分の肩をしつかりつかんだのを確認して、

「じゃ、京太下につけたら声掛けのから」

そつぱりロープを下つてく。

「下につくまでこいつも準備するか。ロープで体、結ぶね。えつと・・・」

「にしがど西門」です

「西門さんか・・・」

「あの、小暮さん? 吹奏楽部の部長だったんですか?」

「えつ、ああそうだよ。此処のね。つこでこにしがどれば古谷、あこつも此処の吹奏楽で副部長やつてたし」

「一人とも、此処の先輩なんですか」

「まあそつなるね」

そんな会話をしているうちに、古谷から降つてこと図があつた。小暮はそれを確認すると、西門の事を背負い、

「じゃ、降つるよ。しつかりつかまつてね」

「はー。あと、下に下つて一段落したら、昔の事教えて下せー」

「時間があればね」

そつぱり、ロープを少しずつ下つてく。

窓の近くの耐震補強の柱に足をつけ、中に入る。

「はいよ」

小暮はそう言って西門を下ろす。

「京太、こっち。いつ火が吹き出すか分からないから、急いで」「分かつた。いくよ」「はい」

3人はその教室から急いで飛び出した。

最終ページ

あれから2時間、火が消し止められ消防が撤収した後、4人はまだそこにいた。

「前と同じ、か」

「・・・・日記に続きを書いて。今日は」

「え？」

武藤の言葉に、3人は顔を見合させる。

「何で？別にいいんじゃない？」

「いいんだよ。これもある意味思に出た」

「・・・・そうですね。私も日記に書いて。あ、谷先輩次の小説この事つてどうですか？」

「うーん・・・・いいかもしれないけど売れるわけ無いな。あの文じや」

「うう・・・」

「あはははは。谷先輩、厳しいですね。編集者として」

「当たり前」

暫くそこには笑い声が響いていた。

「あ、まだいた。よかつたまにあつた」

「？あ、京太じゃん。どうしたの？」

軽く顔にすすをつけた小暮と古谷、それに西田がやつてきた。

「え、彼女がさ俺らの代の吹奏楽の事聞きたいって」

「じゃ、階で少しづつはなしますか」

「どうか暖かい所で。此処じゃ寒くって」

富村が言つたひとことで再び移動し、また吹奏楽の話に花が咲いたのは言つまでも無い。

暫くして . . .

「真弓」電話。安西さんから

「はーい・・・・もしもし?」

『みやつさん? 小説見つけたよ。しかも吹奏楽の事書いた奴。』

「あ、もう見つけたの? はやいなあ」

『ふふふ。ま、それだけだからじやあね』

やつ言ひて安西は電話を切つた。

「や、再開再開」

「はい。頑張ります」

四のページは、これまで全て使ってしまった
・
・
・

最終ページ（後書き）

かなり雑で、強引ですがこれで完結させたいと願っています。

今まで呼んでくれた人々、ありがとうございます。

気が向いたら、付けたし等しているかもしれません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8219c/>

日記

2010年10月9日19時57分発行